

## 論文要旨

氏名 浦田大奨

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

1950年前後の女性労働者と女性史研究

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。  
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

## 1950年前後の女性労働者と女性史研究 要旨

浦田大奨

本論は、井上清『日本女性史』（三一書房、1949年。以下、井上女性史と略。）および、高群逸枝『女性の歴史』全4冊（講談社、1954・58年。以下、高群女性史と略。）の2つの研究で、戦後の日本女性史研究の出発点とする自明視された研究状況を問い直すことにより、両者への際立った注目のもとで忘れられてきた研究を確認し、その意義を明らかにすることを目的とするものである。

序章では、この目的に取り組むための全体の見取り図を提示すると同時に、井上と高群を戦後の女性史研究の出発点とする前提が歴史的に作りあげられていることを述べた。

このとき本論では、女性史論争を紹介し、とりわけ次の2点に注目した。1つは、女性史論争が敗戦後の解放史を対象としつつ、その代表を井上女性史に照準を合わせて議論をおこなっているということである。いまひとつは、論争と並行して村上信彦らによって高群逸枝の再評価が行われているということである。この2点は、今日において戦後の女性史研究の出発点を井上と高群に代表させることに大きな影響を与えていると考える。

しかし、敗戦後に書かれた女性史は、井上と高群の著作だけではない。1970年代に定着した井上と高群への注目のなかで忘れ去られた研究の再検討を行なうにあたり、本論では、同時代の女性とりわけ女性労働者たちの生と女性史研究を重ね合わせながら再検討を行なうという方法を採用した。そのため、全体を大きく2つの部（第Ⅰ部 敗戦後における女性労働者問題の語られ方、第Ⅱ部 女性・女性労働者問題の歴史的把握）に分けて構成している。

以下、各章のたまかな内容を紹介しておきたい。

第1部第1章では、1946年から1950年にかけて刊行された雑誌『働く婦人』によせられた読者投稿をもとに、占領期の女性労働者の抱える問題と、問題と向き合うにあたり歴史を学ぶことが呼びかけられていたことに注目してまとめた。

同誌は、同時代の他の女性雑誌と同様に実用記事や娯楽記事などを掲載しているが、その何よりの特徴は、読者からの投稿を広く求める姿勢、なかでも読者からの投稿に対して、他の読者の意見を募るといった誌上討論によって読者相互の議論を試みていることにある。ここに、個々人の問題を自分だけの問題とせず、他の読者との共有を通じて考えるという生活記録運動に結びつく特徴がある。

女性労働者たちが記述する問題は、職場での過重な労働や男性との関わりをはじめ、企業整備にとまなう配転や職場の解雇などをあげることができる。と同時に、職場の問題とあわせて家庭においても家事を負わなければならない状況を記述している。

本章では、これらの問題に対し、歴史を学ぶことの必要性を記述した隅谷茂子の手記（隅谷「私たちのあゆみ—歴史について—」（『働く婦人』7号、1947年9月）と、歴史を学ぶための教材として7回にわたって連載された、鈴木正四「講座 歴史のみかた」（『働く婦人』18～24号、1948年9月～1949年4月）を取りあげ、歴史を学ぶことを通してその解決や展望を見出そうと呼びかけられていることに注目した。

しかし、1949年から1950年にかけて、企業整備やレッドパージによる労働者への弾圧が強まると、本誌に掲載される投稿も、職場の解雇や労働組合への圧力、それらに対する闘争といったものが中心を占めるようになる。そして、読者も職場闘争に歴史を見出すようになる。各人の固有の体験や生活も、それを闘争や組合、政党へと結びつけてしまい、そこに意義を見出そうとする点に本誌の限界があった。

第1部第2章では、占領期を対象とした前章に続き、講和独立期を対象に女性労働者の問題および母親の歴史を記述することを通して各々の問題に向き合おうとする女性労働者の姿をまとめた。

本章では、この時期に盛んに書かれた生活記録を主な分析の対象としたが（呉羽紡績労働組合文教部編『機械のなかの青春』三一書房、1953年。繊維労働組合生活綴方編集委員会編『明日のある娘ら』三一書房、1954年。）、分析に入る前に、女性解放の現状およびそれへの批判について、現場の女性労働者の手記と、女性たちのおかれている現状に大きな危機感を抱いた知識人として上原専禄と鶴見和子の論説を取りあげて検討を行なった。

本章をまとめるにあたっては、とくに紡績女性労働者に注目した。この時期の紡績業は、朝鮮戦争の勃発にともない、緊急増産を求められ、これを労働者の労働時間の延長で乗りきるが、活況が下火になると労働者の解雇を行なうという状況にあった。

女性労働者たちは、そのおかれている現状として職場の過酷な労働、操短や解雇とその隣り合わせにある貧困を生活記録として記述し、雇用者への反発に加え、何故女性がこのような労苦を強いられるのかという疑問を抱く。このとき彼女たちが、向き合ったのもまた前章と同様に歴史であった。おりしも、ふるかわおさむによって母の歴史を書くことが呼びかけられる時期であり、女性労働者たちも母や家族への聞き取りや手紙のやりとりを通して母の歴史をまとめている。

母の歴史をまとめるなかで娘である女性労働者が学んだのは、現状を無批判に受入れ、何でも諦める母親を反面教師としつつも、そこから抜け出そうと試みている母の姿であった。田中正俊が指摘するように、母と娘ともに遅れた状態としてとどまっているのではなく、そこから自身を変えることに意味を見出している（田中「母の歴史」について」（『歴史評論』57号、1954年7月）。

第2部第3章では、占領期の女性史研究を考察するにあたり、まず、宮本百合子『私たちの建設』（実業之日本社、1946年）をはじめ、占領期に刊行された女性史研究を取りあげ、解放史とよばれる女性史の叙述のありかたの特徴と問題点を指摘した。

そのうえで本章では、第1部第1章で論じた、女性労働者の職場と家庭の問題を意識し、遠藤元男『女性文化史』（新府書房、1946年）と、井上清『日本女性史』（三一書房、1949年）を取りあげて分析を行った。

遠藤の女性史研究は、歴史上の女性たちによる文化の創造や文化に与えた影響と貢献を論じることとあわせて、女性と家庭および社会の関係に注目した女性史を叙述している。

遠藤は、前近代を通じて、女性が家庭に閉じ込められる過程を文化に即して論じているが、近代に入ると、女性たちが労働者として社会進出を求められながら、一方で家庭に縛り付けられている状況を指摘し、これを女性が新たに体験する悲劇として論じる。

このとき、歴史を学ぶことを通じて問題解決の道筋を考えるということを意識したさい、遠藤の説明は、女性への平等の権利と義務の付与という一般的な話題でまとめ、階級の解放を力説する井上と比べて明瞭ではないように思われる。と同時に、「女性は女性であるかぎり、家庭からの生活を捨て、しまふことはできない」と極端に家庭と女性を結んでしまうところに、解放が謳われる状況のなかでそれに反するものとして読まれたことは指摘できよう（遠藤『女性文化史』）。ここに、遠藤女性史が今日にいたるまで顧みられない要因があるように思われる。

一方、井上の女性史研究は、遠藤と異なり女性の解放の道筋が明瞭であった。井上が論じるのは、社会上に搾取者支配者と被搾取者被支配者との不平等が発生した場合に男女の不平等が生まれることであり、女性の解放は、労働者階級によって達成されることを述べ、その団結を求めることにあった。いわゆる階級闘争である。

そのため、井上は各時代の被支配者および女性たちの抑圧の状況と解放のための運動を叙述し、とくに近代以降は女性労働者のストライキや米騒動に力を入れて論じている。第1章で言及した、職場闘争が盛んな時期にあって今と歴史が結びついたものとなっており、この点に読者は共鳴したと考えることができる。

しかし、井上女性史は無批判に女性たちに読まれたのではない。第2部第4章では、民科婦人問題部会の活動と女性史研究を取りあげたが、同会は井上女性史への違和感をひとつのきっかけとして女性史をまとめる動きをおこしている。

本章では、同会がまとめた女性史を分析していく前に、同会の機関紙『婦人問題研究』を通じて会員が同時代の女性（女性労働者）の問題をどのようにみているか、および、読書会で使用した井上女性史への評価の2つの点に注目した。

同会が、機関紙のなかでとくに重視したものは、企業合理化にともなって発生する生活条件の悪化であり、さらに女性であることによって問題が重く押し掛かる現状であった。

このような問題を踏まえたうえで、「逆コースに悩み苦しまねばならない女の人の立場から、これまでの女の人の足跡をたどって女の人を苦しめ、圧迫しているのは何かということを読んでいき」、「女の人自身が体で感じ、憎しみをもつて斗かいに立ち上るために役立つような歴史をつくりあげよう」と呼びかけている（宮古とく子「女性史を学ぶ念願」『婦人問題研究』1953年7月5日）。

一方、同会では、ベーベル『婦人論』などの古典や、井上女性史を取りあげた読書会を行なっている。とくに井上女性史については、女性の解放の道筋を示した著作として高く評価する一方、井上女性史では取りあげられていない問題を取りあげ、井上とは異なる女性史の叙述の可能性を見出し、三井礼子編『近代日本の女性』（五月書房、1953年）の刊行に着手する。

本章では、本書を読み解くにあたり、執筆者である会員たちの世代に注目してみた。執筆者の多くは1920年代の生まれである。そのため、明治・大正時代は執筆者たちにおいても歴史の領域となっており、文学作品に家制度の問題を読み取ることをはじめ、井上女性史と同じく女性労働者に注目し、労働者たちによる運動を軸として叙述している。

しかし、執筆者たちの同時代である昭和時代以降とりわけ戦時下の叙述をみると、女性たちの戦時労働が労働者として成長していく過程と同時に、家族制度を崩壊させることへつながったとし、個人の手紙や生活記録などを用いて叙述をおこなっている。このことは、井上が公式的に語って済ませるところを、人びとの体験や生活から導き出しており、井上とは異なる豊かな女性史を目指した同会の試みが発揮されているように思われる。

このように、女性史を叙述するにあたり新たな試みを行なっているが、結論として女性の解放を、階級および民族の解放に見出してしまい、村上信彦のいう「女性解放の政治的図式」に通じる問題を抱え込み、本書もまた忘却されることにつながったと論じた（村上「女性史研究の課題と展望」『思想』549号、1970年3月）。

以上、本論を通じて明らかになった点として以下のようにまとめた。

1950年前後の女性労働者と女性史研究の考察を通して指摘できることは、多様な女性が過去に存在していたなかで、女性労働者を軸とした歴史が書き記されたことである。

女性史研究は、戦前からの歩みがある。本論では言及できていない点であり、今後の課題のひとつであるが、その歩みのなかで女性労働者あるいは勤労者階級が、その抑圧と戦いを含め、どのように生きてきたかが歴史として書きとめられた。

それ以前にも女性労働者は言及されているが、女性労働者たちのおかれている状況を社会問題として告発するための記録あるいは材料という側面に限定されていたように思われる。

このような状況を、井上女性史ではその点を引き継ぐと同時に、「そのくらしみとよろこび、そのしいたげられたすがたとその解放のたたかい」という歴史上の女性を総体としてまとめあげたところに特徴がある（井上『日本女性史』）。と同時に、石母田正が「四九年は女房たちの年」と呼んでいたように、生活を求めて女性たちが力強く立ちあがる時期において、もっともリアリティをもった女性史研究だったといえよう（石母田正『歴史と民族の発見』東京大学出版会、1952年）。

しかし、女性労働者も職場あるいは運動だけが生活の舞台ではなく、家庭での家事なども同時に押し掛かっている。この点に注目し、近代日本を女性たちにとって解放へと通じるバラ色として描くのではなく、むしろ新たな問題を抱え込むことを鋭く指摘したのが遠藤元男であった。

その一方、民科婦人問題部会は、女性史をまとめるにあたり、女性の生活や体験を重視

し、生活記録などの引用を通して女性史の叙述のあり方を模索している。同会が女性史の叙述にあたり、多様性や豊かさが模索できた背景には、井上女性史への違和感をはじめ、低賃金や首切りなど多様な問題を背負う女性労働者たちの生活記録の執筆を含む学習意欲、そして、真摯に歴史に向き合うなかで自身の生きかたを模索してきた女性たちの存在を忘れることはできない。

このことは、同時代の女性が女性史研究にとって啓蒙の対象としての存在だけではなく、女性史研究に啓蒙されつつ、それを通して再び女性史研究に叙述のありかたを問いかける存在であるということである。女性史研究が女性を変えるのではなく、女性たちの思いや行動もまた女性史研究を変えるきっかけとなるのである。